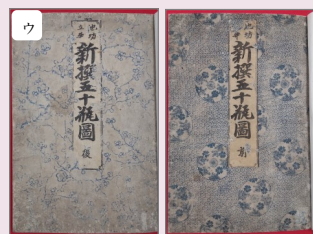




所蔵資料紹介 ～貴重書から～



前回紹介しました『花洛細見図』。今回は同じ元禄時代に関係する資料をご紹介します。

まずはア、『新撰瓶花圖彙』(しんせんへいかずい)。図書館だより34号で紹介しました、猪飼三枝(いかいさんし)編『六角堂池坊井門弟立花砂之物図』(ろっかくどういけのぼうならびにもんていりっかすなのものず)(以下『立花図并砂物』)に続く、2作目となる池坊公式の立花作品集です。

『立花図并砂物』の「古百瓶(こひゃっぺい)」に対して「新百瓶」と呼ばれ、二代専好・専存・専養・三代専好を始め、猪飼三枝、高田安立坊雲泰(あんりゅうぼううんたい)、藤掛似水(ふじかけじすい)など門弟の作品を掲載し、元禄11(1698)年に刊行されました。当館所蔵本は2種類あり、乾(けん)・坤(こん)の2冊



セットでともに26丁のもの、『新撰瓶花圖彙』から49図を抜粋し、同一の奥書があるものをイ、『新撰瓶花圖彙抜粋[専養立華集]』として所蔵しており、参考文献②P123に「池坊短期大学図書館蔵本」と紹介されています。この時代の家元は池坊専養(1655～1711年)で、幼くして家元を継いだ当初は安立坊周玉を初め4人の高弟に支えられていました。『立花図并砂物』から25年、門弟も入れ替わり、作風も「素朴・幽玄・重厚」から「優美・軽快・繊細」へと変化しています(参考文献③より)。参考文献①と②で見比べてみてください。

次にウ、『池坊立華新撰五十瓶圖 前後』をご紹介します。『立花図并砂物』を編集した猪飼三枝の息子・一枝が刊行した作品集で、二代専好、専養と門弟の立花や砂の物図が掲載されています。中でも注目されるのは、元禄5(1692)年の東大寺大仏開眼供養の際に、猪飼三枝と藤掛似水が立てた松一式の立花図です。見開



きで大きく掲載され、寸法も詳しく記されています。花瓶だけで高さが7尺5寸＝約2.3メートル、真の松が3丈2尺＝約9.7メートル、全体で約12メートルという高さで、約16メートルの大仏に釣り合うように立てられたと考えられます。猪飼三枝は「会頭」とあり、池坊門弟の筆頭に位置付けられていました。当館所蔵本は白黒ですが、『立花図并砂物』の元禄5年の再版本にはカラーで掲載されており、参考文献①で見ることができます。

最後のエ、『元禄立華絵図』については紙面の都合で次号で紹介します。彩色された写本の卷子本で、状態もよく色も綺麗ですのでぜひお楽しみに。



展示資料

- ・ア、『新撰瓶花圖彙 乾坤』山中忠左衛門撰、元禄11(1698)年、00051932/0051933
- ・イ、『新撰瓶花圖彙抜粋[専養立華集]』山中忠左衛門、[元禄11(1698)年]、00047307
- ・ウ、『池坊立華新撰五十瓶圖 前後』猪飼三左衛門、河内屋太助、00047436

参考文献

- ・①『立花図并砂物：六角堂池坊井門弟立花砂之物図』(「いけばな美術名作集 第1巻」)西村勉著、日本華道社、2003年
- ・②『新撰瓶花図彙』(「いけばな美術名作集 第4巻」)西村勉著、日本華道社、2004年
- ・③『1日5分いけばなの歴史』細川武稔著、淡交社、2022年
- ・「華道 87巻6号」日本華道社、2025年6月

花と寺社～番外編・花瓶と東大寺～

今から1300年ほど前の奈良の都では災害や疫病が流行していました。天平15(743)年、聖武天皇は大仏を作ることの人々を救おうと盧舎那大仏(るしゃなだいぶつ)造立の詔(みことり)を発し、天平勝宝4(752)年に完成した大仏の開眼供養が行われました。その後、戦国時代の永禄10(1567)年に大仏殿を始めとする建物が焼失し、仏像の頭部は崩れ落ち、野ざらしとなってしまいます。江戸時代に入り公慶(こうけい)上人が全国を行脚して寄付を募り、大仏が修造され、元禄5(1692)年に大仏開眼供養が行われました。その時の様子が描かれた「東大寺大仏開眼供養図」(①)には、小さくてわかりにくいのですが大仏の前に置かれた一對の立花らしきものが描かれています。この時の花瓶は上記の『新撰五十瓶圖』でも描かれているように、蝶をデザインした耳(飾り)が付いています。でも、本来は6本の足が8本あり、その理由はわかっていません。花瓶は青銅製で藤掛似水の一門が献じており、現在も大仏の前に安置されているそうです。東大寺にお参りの際は、花瓶と蝶の飾りにも注目してみてください。



東大寺大仏殿。
鹿や人で賑わっています

参考文献

- ・『1日5分いけばなの歴史』細川武稔著、淡交社、2022年
- ・①『畿内 一』(「江戸時代図誌 第17巻」)西川幸治/木村至宏編、筑摩書房、1977年